

栗原の稲作通信

総括号 令和8年1月6日発行

宮城県栗原農業改良普及センター

宮城県米づくり推進栗原地方本部

電話番号 0228-22-9404

1 管内の気象と生育経過

(1) 気象経過

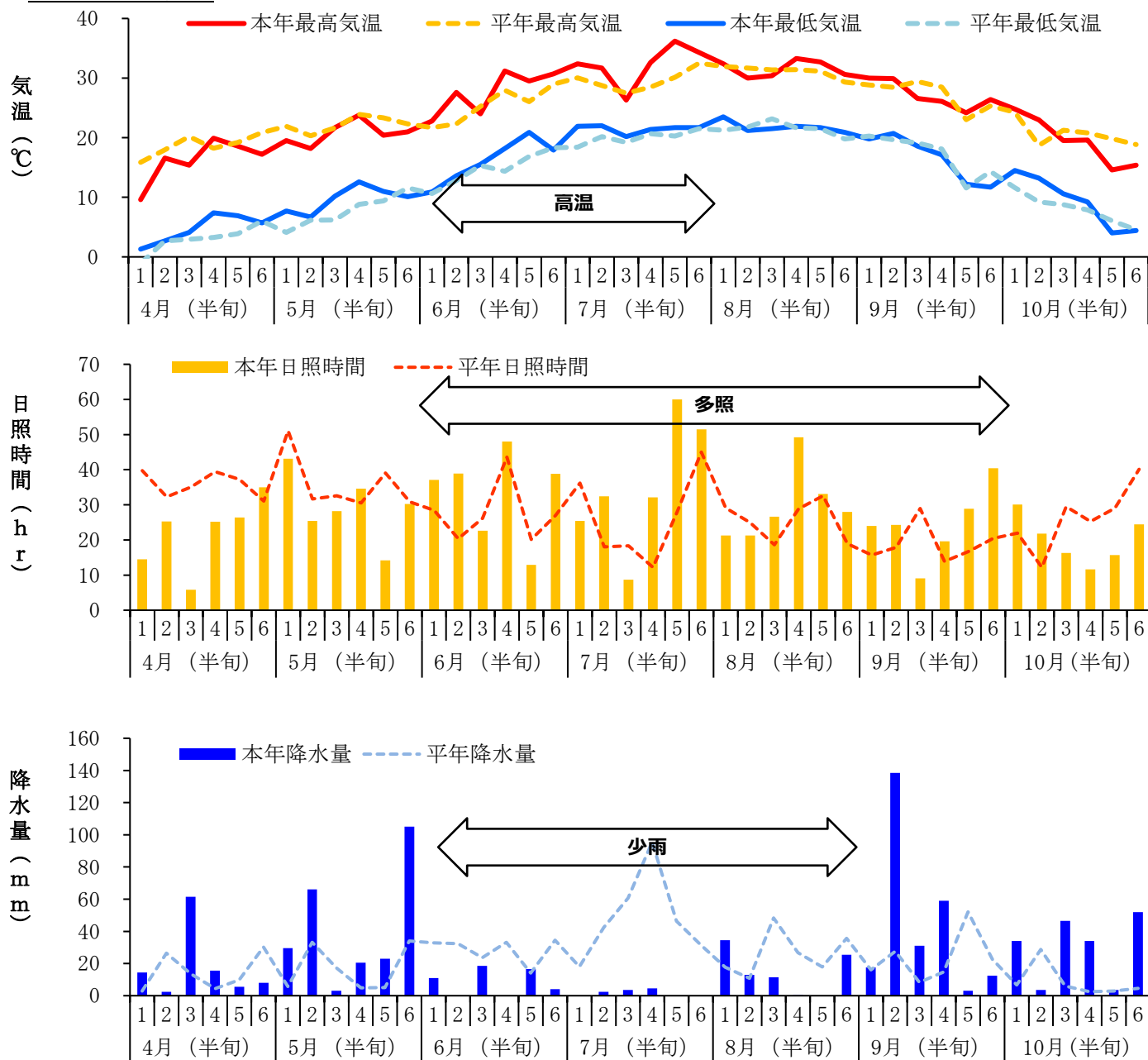


図1 令和7年度の半旬別気象経過（築館アメダス） ※平年値:令和4年～令和6年の3か年平均

イ 育苗期から田植え期（4～5月）

- ・4～5月は過去3年と比べて、気温はやや低く、日照時間はやや少なく、降水量はやや多く推移しました。

ロ 分けつ期から幼穂形成期（6～7月）

- ・6～7月は過去3年と比べて、気温は高く、日照時間は多く、降水量は少なく推移しました。

ハ 出穂期から成熟期（8～9月）

- ・8月は過去3か年と比べて、気温はやや高く、日照時間は多く、降水量は少なく推移しました。
- ・9月は過去3か年と比べて、気温は平年並み、日照時間は多く、降水量は多く推移しました。

(2) 生育経過（ひとめぼれ）

イ 育苗期から田植え期（4～5月）

- ・田植時における「苗（ひとめぼれ生育調査ほ県平均）」は平年より草丈はやや短く、葉数は少なくなりました。（表1, 草丈・葉数）
- ・管内における田植え作業は平年と比べて始期（5月9日）が5日、盛期（5月17日）は3日、終期（5月25日）は1日遅くなりました（表2）。

表1 生育調査ほの苗質

| 品 種 | 地区 | | 田植日 | 草丈(cm) | 葉数(枚) |
|-------|-----|-------|------|--------|-------|
| ひとめぼれ | 若柳 | 本年値 | 5/19 | 19.5 | 3.3 |
| | | 平年比・差 | 2日早 | 108% | -0.3 |
| | 一迫 | 本年値 | 5/13 | 10.9 | 2.7 |
| | | 平年比・差 | 2日遅 | 73% | -0.2 |
| | 県平均 | 本年値 | 5/14 | 14.3 | 2.9 |
| | | 平年比・差 | 3日遅 | 94% | -0.1 |
| つや姫 | 築館 | 本年値 | 5/28 | 15.4 | 3.0 |
| | | 平年比・差 | 6日遅 | 84% | -0.4 |
| | 県平均 | 本年値 | 5/14 | 13.8 | 2.7 |
| | | 平年比・差 | 3日遅 | 79% | -0.2 |

注1：平年差は過去3年における平均値との差

注2：「県平均」は県内複数地点の水稻生育調査ほの平均値

表2 栗原管内の水田における田植え作業状況

| 年次 | 田植期 | | |
|-----|-----|------|------|
| | 始期 | 盛期 | 終期 |
| 本年 | 5/9 | 5/17 | 5/25 |
| 平年 | 5/4 | 5/14 | 5/24 |
| 平年差 | 5日遅 | 3日遅 | 1日遅 |

注：始期、盛期、終期とは管内全ほ場の5%、50%、95%に達した日

ロ 分けつ期から幼穂形成期（6～7月）

- ・葉色は6月20日に期待葉色値となりましたが、以降は葉色が低下し平年よりも低く経過しました（図2, 葉色）。
- ・茎数は田植え後に緩やかに増加し、生育期間を通して茎数は少ないまま推移しました。その結果、最高分けつ期（7月1日頃）の茎数も平年より少なくなりました。（図2, 茎数・穂数）。
- ・草丈や葉数は平年並みに推移しました（図2, 草丈・葉数）。

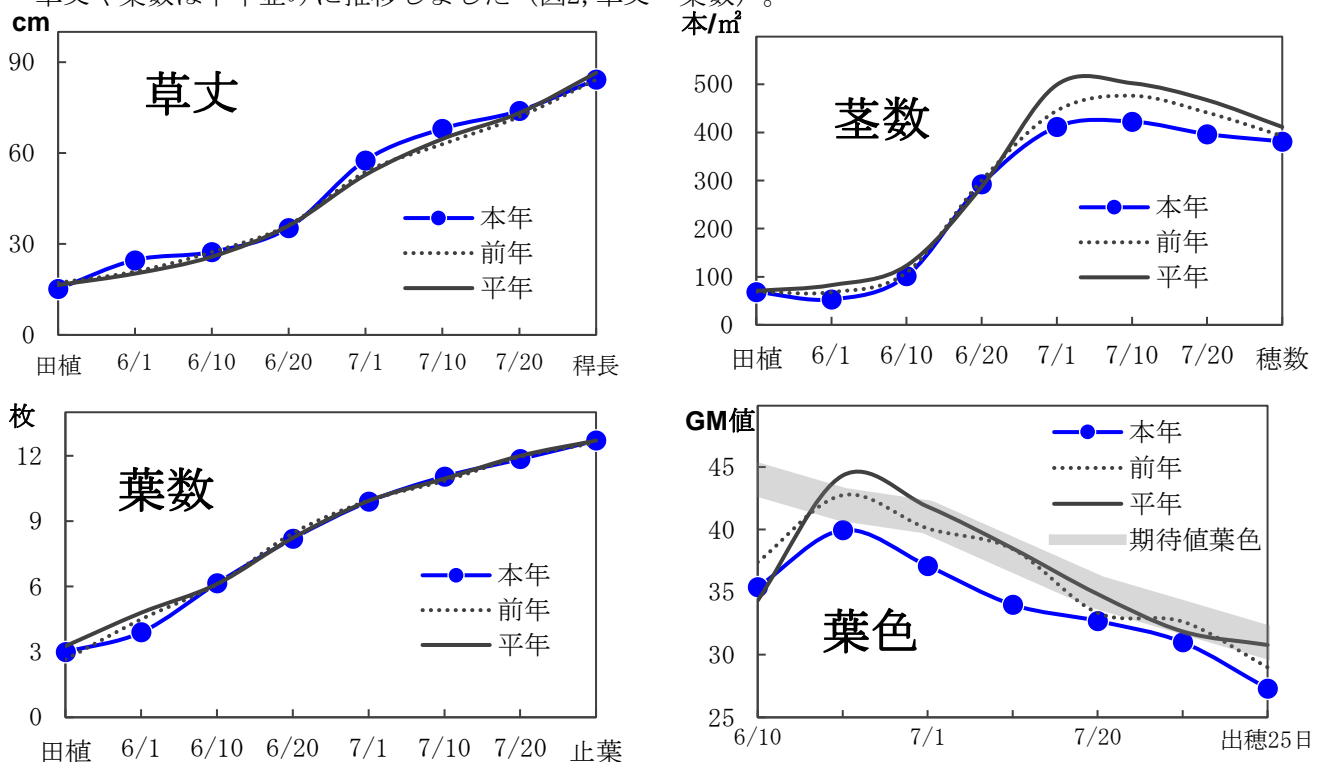


図2 生育調査ほ（ひとめぼれ 若柳、一迫）の生育の推移

ハ 出穂期から成熟期（８～９月）

- ・ 幼穂形成期から出穂期にかけては高温・多照で推移したことで生育が早まり、管内における出穂期は7月31日となり平年よりも早まりました(表3)。
- ・ 9月以降は周期的にまとまった降雨となり、刈遅れたほ場などでは倒伏が多くみられました。
- ・ 管内の刈取盛期は9月28日となり平年より3日早まりました(表3)。

表3 栗原管内の水田における出穂期、刈取期

| 年次 | 出穂期 | | | 刈取期 | | |
|-----|------|------|------|------|------|-------|
| | 始期 | 出穂期 | 穂揃い期 | 始期 | 盛期 | 終期 |
| 本年 | 7/26 | 7/31 | 8/13 | 9/16 | 9/28 | 10/13 |
| 平年 | 7/28 | 8/1 | 8/10 | 9/19 | 10/1 | 10/15 |
| 平年差 | 2日早 | 1日早 | 3日遅 | 3日早 | 3日早 | 2日早 |

注：始期、盛期、終期とは管内全ほ場の5%、50%、95%に達した日

2 作柄（生育調査ほ）

（1）収量構成要素（ひとめぼれ）

- ・ 「ひとめぼれ」は平年と比較して「 m^2 当たり穂数」が少なく（79～96%）なり、「1穂粒数」が多く（103～115%）なりましたが、「 m^2 当たり粒数」は平年と比較して並～やや少なく（91～99%）なりしました（表4）。
- ・ 「玄米千粒重」は平年と比較して並～やや軽く（96～101%）なり、「登熟歩合」は並～高く（99～121%）なりましたが、「精玄米重」は平年と比較して並～やや少なく（93～102%）なりしました（表4）。

表4 生育調査ほ、展示ほの収量構成要素

| 品 種 | 地区 | | m^2 当たり 穂数 (本/ m^2) | 1穂粒数 (粒/本) | m^2 当たり 粒数 (百粒/ m^2) | 千粒重 (g) | 登熟歩合 (%) | 精玄米重 (kg/a) |
|---------|-----|------|--|---------------|---|------------|-------------|----------------|
| ひとめぼれ | 若柳 | 本年 | 461 | 65.4 | 302 | 22.2 | 97.9 | 53.1 |
| | | 前年比 | 101% | 99% | 100% | 96% | 114% | 89% |
| | | 平年比 | 96% | 103% | 99% | 96% | 121% | 93% |
| | 一迫 | 本年 | 301 | 76.7 | 231 | 22.8 | 85.8 | 48.5 |
| | | 前年比 | 80% | 116% | 92% | 98% | 92% | 89% |
| | | 平年比 | 79% | 115% | 91% | 97% | 99% | 95% |
| | 県平均 | 本年 | 401 | 76.0 | 301 | 22.7 | 84.4 | 56.9 |
| | | 前年比 | 94% | 106% | 99% | 100% | 104% | 102% |
| | | 平年比 | 92% | 109% | 99% | 101% | 102% | 102% |
| つや姫 | 築館 | 本年 | 356 | 89.4 | 318 | 22.7 | 82.5 | 59.3 |
| | | 前年比 | 98% | 95% | 93% | 103% | 116% | 111% |
| | | 平年比 | 94% | 109% | 103% | 100% | 99% | 103% |
| | 県平均 | 本年 | 381 | 87.8 | 335 | 21.9 | 85.4 | 56.3 |
| | | 前年比 | 100% | 103% | 106% | 99% | 108% | 103% |
| | | 平年比 | 96% | 103% | 101% | 100% | 104% | 102% |
| にじのきらめき | 若柳 | 本年 | 372 | 111.3 | 414 | 22.5 | 93.6 | 79.4 |
| | | ※参考値 | 400 | 80～82 | 320～330 | 23.5 | 85.0 | 65.0 |
| 乾直ひとめぼれ | 志波姫 | 本年 | 244 | 53.6 | 131 | 22.5 | 78.6 | 17.0 |
| | | ※参考値 | 347 | 74.2 | 258 | 23.3 | 70.3 | 42.1 |

注1：「平年比・差」は過去3か年平均値との比較

注2：「県平均」は県内複数地点の水稻生育調査ほの平均値（ひとめぼれ18地点、つや姫7地点）

注3：「にじのきらめき」は栽培の目安（農研機構）を参考値とした

注4：「乾直ひとめぼれ」は前年値、平年値が無い場合、令和5年度の値を参考値とした

(2) 玄米品質（ひとめぼれ）

- ・生育調査ほの玄米品質調査では、「ひとめぼれ」の「整粒比」が平年より高く（9.7～17%）なりました。また、「白未熟粒比」は平年より低く（-4.4～-3.3%）なりました（表5）。

表5 生育調査ほ、展示ほの玄米品質

| 品種 | 地区 | | 整粒比 (1.9mm ≤ : %) | 胴割粒比 (%) | 白未熟粒比 (%) | 他未熟粒比 (%) | 青未熟粒比 (%) | 着色粒比 (%) | 他被害粒比 (%) |
|---------|-----|-----|-------------------------|-------------|--------------|--------------|--------------|-------------|--------------|
| ひとめぼれ | 若柳 | 本年 | 77.8 | 0.7 | 2.6 | 17.8 | 0.5 | 0.1 | 0.4 |
| | | 前年差 | 13.5 | -1.7 | -3.1 | -8.1 | -0.7 | 0.1 | 0.2 |
| | | 平年差 | 17.0 | -1.9 | -4.4 | -5.9 | -3.6 | -0.1 | -0.3 |
| | 一迫 | 本年 | 76.8 | 0.6 | 2.7 | 18.8 | 1.2 | 0.0 | 0.0 |
| | | 前年差 | 10.1 | -1.8 | -2.7 | -6.2 | 1.0 | 0.0 | -0.1 |
| | | 平年差 | 15.0 | -4.8 | -4.1 | -4.9 | 0.0 | -0.2 | -0.4 |
| | 県平均 | 本年 | 74.0 | 1.3 | 3.8 | 17.5 | 3.0 | 0.1 | 0.2 |
| | | 前年差 | 8.1 | 0.1 | -2.0 | -6.7 | -0.7 | 0.0 | 0.1 |
| | | 平年差 | 9.7 | -1.8 | -3.3 | -4.2 | -0.9 | -0.1 | -1.0 |
| つや姫 | 築館 | 本年 | 80.4 | 0.7 | 1.7 | 16.0 | 1.2 | 0.0 | 0.0 |
| | | 前年差 | 13.8 | -0.2 | 0.1 | -10.1 | -3.7 | 0.0 | 0.0 |
| | | 平年差 | 17.0 | -0.6 | -1.5 | -9.5 | -4.6 | -0.2 | -0.5 |
| | 県平均 | 本年 | 76.3 | 2.1 | 1.6 | 17.7 | 1.9 | 0.1 | 0.2 |
| | | 前年差 | 9.9 | -1.0 | -0.8 | -9.6 | -0.7 | 0.0 | 0.2 |
| | | 平年差 | 15.3 | -2.9 | -2.3 | -6.9 | -3.8 | -0.6 | -0.6 |
| にじのきらめき | 若柳 | 本年 | 74.7 | 0.1 | 4.1 | 17.7 | 3.2 | 0.2 | 0.0 |
| 乾直ひとめぼれ | 志波姫 | 本年 | 65.7 | 0.4 | 3.8 | 27.0 | 1.8 | 0.1 | 0.9 |

注1：「平年差」は過去5か年における平均値との差

注2：「にじのきらめき」は調査生産者変更のため前年値、平年値なし

注3：「乾直つきあかり」は令和7年から調査開始のため前年値、平年値なし

注4：穀粒判別機は「サタケ RQI-100B」を使用

- ・平年より整粒比が高くなった要因として、m²当たり籾数が並～少なかったことに加え、出穂後20日間の日最高気温の平均が31.5℃、日最低気温が22.0℃と昨年および一昨年より低く推移したこと、さらに日照時間も十分に確保されたことにより、登熟（デンプンの合成・転流・蓄積）が進んだためと考えられます（表6）。

表6 出穂後20日間の日平均気温、日照時間（築館アメダス）

| 項目 | R7 | R6 | R5 | R4 |
|-------------|------|------|------|------|
| 日最高気温の平均(℃) | 31.5 | 32.3 | 33.1 | 29.5 |
| 日最低気温の平均(℃) | 22.0 | 22.9 | 23.9 | 21.0 |
| 日照時間(時間) | 118 | 123 | 130 | 67 |

3 県内の作柄（東北農政局発表）

（1）収量構成要素

- ・今年度は田植え期以降、生育期間を通じて茎数が少なく推移したことで穂数が少なくなり、1穂粒数はやや多かったものの、最終的な全粒数が少なくなりました。よって、前年産より25kg少ない**525 kg/10 a**（1.9mmふるい）、作況単収指数は **99** となりました(表7)。
- ・宮城県北部では**533 kg/10 a**（1.9mmふるい）、作況単収指数 **99** となりました(表7)。

表7 令和7年産水稻の予想収穫量（東北農政局 令和7年12月12日発表）

| 区分 | 10 a 当たり 収量 (1.9mm) | 前年対比 (%) | 主な収量構成要素（前年比較） | | | 作況単収 指数 |
|-----|---------------------------|-------------|----------------|-------|-----|------------|
| | | | 穂数 | 1 穂粒数 | 全粒数 | |
| 宮 城 | (kg) 525 | 95 | 少ない | やや多い | 少ない | 99 |
| 北 部 | 533 | 95 | 少ない | やや多い | 少ない | 99 |

注1：主な収量構成要素（前年比較）に用いた表示区分は、「多い」が106%以上、「やや多い」が105～102%、「前年並み」が101～99%、「やや少ない」が98～95%、「少ない」が94%以下に相当する

注2：作況単収指数は、生産者が使用しているふるい目幅ベースで算出した10 a 当たり収量の前年産までの5か年中3年平均（最高、最低除く。）に対する10 a 当たり収量の比率

（2）玄米品質

- ・令和5、6年度と比べると登熟期間の気温はやや低く経過したことで、10月31日現在の**1等米比率は93.4 %**と昨年より高くなっています(表8)。
- ・2等以下に格付けされた主な理由は「形質」(49.5%)、「着色粒」(36.4%)となっています。

表8 水稻うるち玄米の1等比率（東北農政局 10月31日現在 令和7年11月28日発表）

| 1 等米比率(%) | 令和7年産 | 令和6年産 | 令和5年産 | 令和4年産 | 令和3年産 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 各年10月31日現在 | 93.4 | 89.8 | 82.9 | 96.2 | 93.9 |
| 各年最終 | | 89.8 | 85.3 | 94.2 | 92.5 |

- ・一方で、本年の6月～8月までの降水量がかなり少なくなったことで、中干し後に再入水できなかったほ場では、不稔の発生や登熟不良がみられました。
- ・品種別1等米比率は、ひとめぼれ95.6 %、ササニシキ74.2 %、つや姫95.7 %、だて正夢99.3 %となりました(表9)。

表9 主な品種銘柄別の等級比較（水稻うるち玄米）（東北農政局 10月31日現在 令和7年11月28日発表）

| 品種 | 検査数量 (トン) | 等 級 別 比 較 (%) | | | |
|-------|--------------|---------------|------|-----|-----|
| | | 1 等 | 2 等 | 3 等 | 規格外 |
| ひとめぼれ | 115,228 | 95.6 | 4.1 | 0.2 | 0.1 |
| ササニシキ | 9,925 | 74.2 | 23.4 | 2.1 | 0.3 |
| つや姫 | 24,900 | 95.7 | 4.1 | 0.2 | 0.0 |
| だて正夢 | 2,417 | 99.3 | 0.7 | 0.0 | — |

5 病害虫の発生状況（宮城県病害虫防除所の県内調査結果）

（1）葉いもち・穂いもち

発生量：平年並（葉いもち）、やや少ない（穂いもち）

- ・葉いもちでは、6月以降は気温が高く降水量が少なく推移したため、感染に不適となりました。
- ・穂いもちでは、出穂期以降は気温が高く降水量が少なく推移したため、感染には不適となり、その後の病勢いの進展は緩慢となりました。



図3 いもち病の病斑

（2）斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ）

発生盛期：

越冬世代成虫 6月第4半旬（平年：6月第5半旬）

第1世代成虫 7月第3半旬（平年：7月第5半旬）

第2世代成虫 8月第2半旬（平年：8月第4半旬）

発生量：多い（アカスジカスミカメ成虫）

やや多い（斑点米）

- ・6～8月にかけて気温が平年よりも高く推移したことから、カメムシ類の発生盛期が早まりました。また、巡回調査ほ場において本田内において斑点米カメムシ類を誘因する雑草があるほ場が平年より多くなったことから、本田侵入を早め、発生量が平年を上回った要因と考えられます。



図4 主要品種である
アカスジカスミカメの成虫



図5 大型の
クモヘリカメムシ

（3）紋枯病 発生量：多い

- ・昨年度の発生量が多かったことに加え、紋枯病は6月の気温が高いほど発病株率が高くなる特性があることから、今年度は発病が多くなったと考えられます。さらに、8月中旬以降に降水量が多くなったことにより、発病度も高まりました。



図6 紋枯病の発病株

（4）ばか苗病 発生量：多い

- ・育苗施設の巡回調査では、発病地点率と発病箱率で平年より高くなりました。



図7 ばか苗病の発病株

6 次年度に向けて

(1) 土づくりによる地力向上 → 玄米品質の向上に有効

近年は生育期間中の気温が高く推移しているため、施肥窒素の減少が早まり、肥料切れの目安であるアンモニア態窒素残存率 20%を下回る時期が6月下旬～7月上旬頃となっています。生育後半は地力窒素への依存度が高くなることから、地域の土壌特性や有機質資源の確保状況に応じて、堆肥や土づくり肥料を計画的に施用しましょう。

イ 堆肥や土づくり肥料の施用

- ・水田では、概ね年間 100kg/10a の腐植が分解・減少しており、完熟牛ふん堆肥約 1 t の施用で補うことができます。肥料コスト上昇や気象変動による収量・品質の不安定化に対応するため、土壌診断の結果を踏まえ、有機質資源（堆肥、稲わら等）や土づくり肥料を適量施用することが重要です。
- ・倒伏軽減には、稲体の強化と根系の充実が重要となります。ケイ酸カリの施用により、根張りの向上、稈の強化（倒伏軽減・いもち病抵抗性の強化）、受光態勢の改善による登熟促進などの効果が期待できます。施肥は春の基肥施用に加え追肥でも効果が高いです。

ロ 深耕

- ・深耕によって根が広がる層（根域）をしっかりと確保することは、収量や品質の安定・向上につながり、気象変動に強い米づくりにも有効です。土づくりと合わせて、毎年 1 cm 程度ずつ作土深を深め、最終的に 15 cm 程度まで深耕することを心がけましょう。

(2) 適正な追肥による生育量・葉色管理 → 収量確保と玄米品質向上

近年は生育期間を通して気温が高く推移しているため、施肥窒素の溶出が早まり、水稻の葉色が平年より早く低下する傾向がみられます。そのため、生育後半まで葉色が維持されるよう、適切な基肥の施用と、生育に応じた追肥の実施が重要となります。

省力的な追肥方法として、水口流し込み、ドローンの活用などもありますので、葉色や生育量をよく観察し、倒伏のリスクがないよう適切な生育判断に基づき積極的に追肥を行いましょう。

表 10 追肥時期の目標生育量と追肥量の目安 *生育量の範囲内から下回る場合に追肥が可能

| 品 種 | 幼穂形成期（幼穂長 1 ～ 2 mm） | | | 減数分裂期（幼穂長 3 ～ 12 cm） | | |
|-------|---------------------|--------------|-------------------------|----------------------|--------------|-------------------------|
| | 茎数 （本/㎡） | 葉色 （葉緑素計） | 追肥量 （窒素成分） （/10a） | 茎数 （本/㎡） | 葉色 （葉緑素計） | 追肥量 （窒素成分） （/10a） |
| ひとめぼれ | 470～530 | 38～40 | 1kg | 450～500 | 35～37 | 1kg |
| ササニシキ | 720～760 | 34～36 | （しない） | 550～580 | 32～34 | 1 ～ 1.5kg |
| つ や 姫 | 550～580 | 35～37 | 2kg | － | － | （しない） |

表 11 追肥も主な効果・影響（◎：効果高い、○：効果あり、×：悪影響あり）

| 施用時期 | 穂数の増加 | 1穂穎花数の増加 | 1穂穎花数の減少防止 | 登熟の良化 | 下位節間の伸長と倒伏 | 玄米タンパク質増加 |
|-------|-------|----------|------------|-------|------------|-----------|
| 幼穂形成期 | ○ | ◎ | ○ | | × | |
| 減数分裂期 | | ○ | ◎ | ◎ | | |
| 穂揃期 | | | | ○ | | × |

(3) 幼穂形成期から出穂後30日頃までの水管理

- ・ 幼穂形成期から出穂・開花期にかけては、稲体の水の吸収量が最も多く、この時期に水分が不足すると、幼穂の発育や開花受精が妨げられます。また、出穂後に水分が不足すると登熟歩合が低下させるため収量・品質が低下します。そのため、水分を与えつつ酸素を供給する間断かん水が基本となります。
- ・ 一方で、用水の確保が難しいほ場においては「飽水管理（走水等により土壌を常に湿潤状態に保つ水管理）」（図8）を行いましょう。

ほうすいかんり ～飽水管理とは～

従来の水管理方法に比べ、限られた用水で実施可能となります。また、間断かん水に比べ、より土壌を酸化的に保ち、根の活性が高まる管理法です。

✓実施時期：幼穂形成期から出穂後30日頃まで。

✓入水の目安：水尻を閉めたまま自然落水させ、水田の足跡に水がなくなった頃、または、番水のタイミングで入水する。

✓効果：通常の湛水管理では夜間に水温が下がりづらいため、稲体の温度も下がらず、光合成で作られた養分を呼吸で消費してしまいます。⇒白未熟粒の発生を助長
一方で、「飽水管理」では、夜間に稲体の温度が下がるため、湛水管理よりも白未熟粒の発生を抑制することが期待できます。

重要：入水が的確に行えるように、水田の溝切りは必ず行いましょう。

水尻を閉め、田面が浸るくらい（ひたひた）になるように入水する。



自然に落水して、足跡や溝に水が無くなる頃、又は番水のタイミングで再び入水し、ほ場が湿っている状態を保つ。

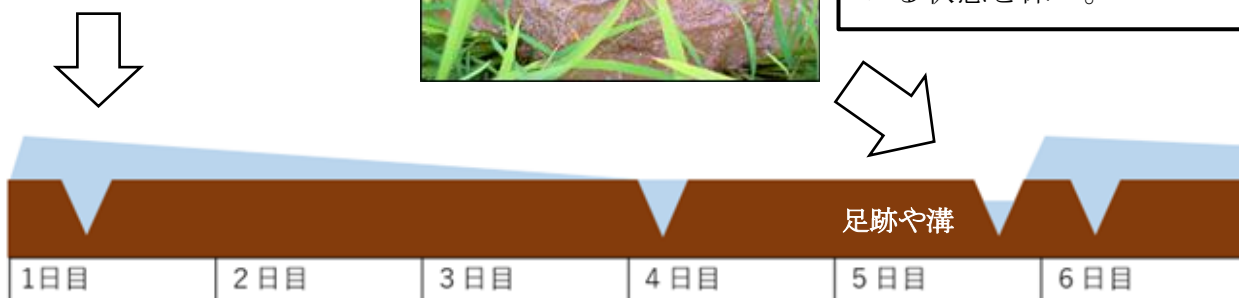


図8 ほ場における飽水管理（ほうすいかんり）の方法

- ・ 落水時期は出穂後30日以降とします。早期落水による、登熟期の水分不足は品質・収量を大きく低下させるので、適期落水に努めましょう。

(4) 雑草対策

令和7年産は、ノビエが残ったほ場が一部でみられました。除草剤の効果を十分に発揮させるため、次の点に留意しましょう。

イ 発生草種に合わせた適切な除草剤の選択と適期の使用

- ・今年発生した雑草に合わせ、最も効果の高い除草剤を選びましょう。
- ・効果を安定させるため、除草剤ごとに決められている「適用葉齢」を必ず確認し、適期に散布することが重要となります。

ロ 除草効果を高めるための丁寧な代かき、畦畔補修

- ・代かきは丁寧に行い、ほ場をできるだけ均平にすることで、除草剤の処理層が安定します。
- ・雑草が多いほ場では、田面の不均平や畦畔・水尻の漏水などが原因となることが多いため、畦畔等の補修や水管理を徹底し湛水機能を維持することで、除草剤の効果を十分に引き出すことができます。修正

○栗原農業改良普及センターでは、作物の施肥設計のための 土壌分析を受け付けています。

1 土壌診断をするメリット

- ① 土壌養分の過不足がわかり、**作物の収量・品質が安定します！**
- ② 土づくり資材等の適切な投入量がわかることで、**施肥コストを減らすことができる可能性がります！**

⇒土壌診断は「**土の健康診断**」です。作ごとの診断をおすすめします。

2 注意点など

- ① 施肥設計に活用する場合は原則「**施肥する前**」に土を採取します。
- ② 土の採取方法等でわからないことがありましたら、普及センターまでお気軽にご相談下さい。

問い合わせ先:栗原農業改良普及センター 先進技術班 TEL:0228-22-9404